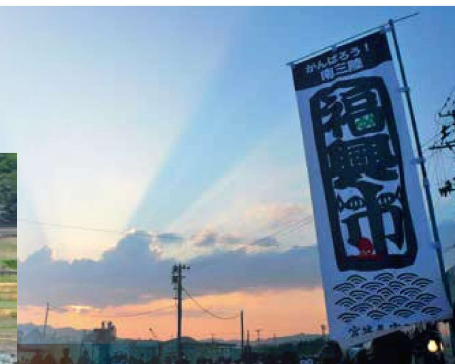


第2章

絆～新たに生まれた交流と
支援への感謝

ボランティアへの感謝と
「南三陸応援団」

まちに元気を
～南三陸復興市 100回までの足取り

海を越えて
～台湾からの支援

持続的な被災地支援
～繋がりを広げ、思いを未来に紡ぐ

第2章 絆～新たに生まれた交流と支援への感謝

ボランティアへの感謝と
「南三陸応援団」

「町を助けてください」 町長の切実な呼び掛けに
全国、そして海外からも続々とボランティアが駆け付けた。
避難所運営、生活再建、思い出探し、そして心のケア・・・
さまざまな形で町民と町の復興を支えてくれた。
そうしたボランティアの受け入れ体制を指南してくれたのも
阪神淡路大震災を経験したボランティアだった。
4年間で15万人にも及んだボランティアの方々との「緑」は
今も新たな交流を育んでいる。

震災から8年が過ぎてもボランティアたちは田植え作業に駆け付けた(令和元年5月27日)

「町を助けてください」
町長の声はメディアが全国へ
伝えた

東日本大震災が発生した3月11日。
大津波が屋上にまで達した災害対策
庁舎に取り残されて消息不明となっ
ていた佐藤仁町長は、12日朝、消防
団員と町職員に助けられながら庁舎
屋上から脱出。約1,000人が避難し
ていた南三陸町総合体育館「ベイサ
イドアリーナ」に移動し、正午ごろ、
災害対策本部（以下：災対本部）を
立ち上げた。

災対本部長となった佐藤仁町長
は、早くもアリーナに詰め掛けていた
多くの報道陣を前に、発災後初めて
の記者会見に臨んだ。

幾つかの質疑応答の後、町長は
「南三陸町は津波被害で壊滅してし
まいました。全国の皆さんから、応援
やご支援を賜りますよう、よろしくお
願いします」と、マイクやカメラを通じ

て町に対する救援や支援を訴えた。

「南三陸町は、気仙沼市や石巻市
という大きな『市』に囲まれた小さ
な町です。支援の多くは気仙沼市や
石巻市に先に届けられるのではない
かという気持ちがありました。もちろ
ん、小さな町だから支援が届かない、
なんていうことはありません。でも、
とにかく町から情報を発信したかつ
た。大きな声で、助けてくださいとい
うことが大切なのだと思ったのです」
(佐藤仁町長)

窮状を伝え、「欲しいものは欲しい」
とはっきりと伝える。以後、毎日午後3
時を定時と決めた記者会見の内容を
受けて、各マスコミは「南三陸町」とい
う名前を全国に何度も伝えた。

緊急車両等の通行のために最低
限のガレキ処理や簡易な段差修正
等を行う道路啓開が進むにつれて、
救援ルートが開け、ベイサイドアリー
ナや学校体育館等には、支援物資
がぎっしり詰まった段ボール箱が、

どんどん積み重ねられていった。企
業や支援団体はもちろん、個人名で
「町の皆さんへ」と宛てた箱も多く
届けられた。

「メディアが南三陸町の様子を広く
発信してくれたことで、支援物資の宛
先を南三陸町としてくださった方が多
かったのだらうと思います。とても
嬉しく、心強かったです。」(佐藤仁
町長)

頼れる力を受け取る
災害ボランティアセンター

東日本大震災発災直後、南三陸町
には、全国から個人やNPO団体、有
志グループといったボランティアたち
が町へ駆け付けた。

心強い彼らの力を受け取る力
「受援力」を確かなものとするため
に、町は災害ボランティアセンター
(以下：VC)の立ち上げを急いだ。南
三陸町社会福祉協議会（以下：南三

陸社協）がその役割を担った。

南三陸社協の志津川事務所は、志
津川高校（現：南三陸高校）のすぐ
下の廻館地区にあった。一次避難場
所にも指定されていた事務所は民間
の特別養護老人ホームと隣り合っ
て建っていたが、津波は両施設に到達
し、デイサービスセンターでは利用者
11名と社協職員2名が亡くなった。

拠点施設を失って業務が混乱す
る中、町の災対本部から社協に「多
くのボランティアを受け入れるため
にVCを開設してほしい」との依頼が
あった。

「震災以前に策定された町の防災
計画では、災害発生時は南三陸社協
が中心となってVCを立ち上げるこ
となっていました。しかし、水も電気
も無い状況で、町から委託されてい

るデイサービスや老人福祉センター
の運営等の通常業務もありました。
要請に対して躊躇したというのが正
直なところでした」と、南三陸社協の
事務局長兼総務課長の三浦真悦さん
は当時を振り返る。

「発災の1カ月前の2月には宮城県の
社会福祉協議会とともに町としての
マニュアルを作成し、机上ではありま
すが訓練なども実施しました。しかし
そのマニュアルは津波に流されてし
まいました」

そんな中、災害時相互支援協定を
結んでいた「全国社会福祉協議会／
近畿ブロック」の応援部隊や山形県
社会福祉協議会が3月19日に駆け付
けてくれた。3月25日には、東京の認
定NPO法人JHP学校をつくる会も合
流、VCの立ち上げについて直ちに協

議を開始した。

まず必要となるVCの看板、ボラン
ティア登録受付票、登録マニュアル
等を作成し、3月26日「南三陸町災
害ボランティアセンター」をベイサイ
ドアリーナ駐車場に開設した。

VCができるまでは、連日さまざ
まなボランティアが避難所に押し掛け
るようになってきた。避難所が決めた
やり方に必ずしもそぐわないケース
もあり、避難者たちは不安を感じる
こともあったという。VCのスタッフた
ちは「復興の主役は住民。住民たちの
やり方や流れを尊重しながら、そ
のサポートを最大限行っていく」こと
を確認し合い、公的VCとして住民た
ちとともに体制を築いていった。



災害ボランティアセンターの立ち上げ(平成23年3月26日)



朝8時31分 災害ボランティアセンターの受付には長い列が(平成23年9月4日)



災害ボランティアセンターテント内の受付(平成24年6月27日)



ボランティアのニーズ表(平成23年3月30日)

第2章 絆～新たに生まれた交流と支援への感謝

協働しながら築き上げた
信頼という「絆」

VCでは、ボランティアの活動時間を午前9時から午後4時までと定めて、メンバーにシフトを割り当てた。

ボランティアのニーズはたくさんあった。ボランティアたちは、そのニーズに大いに応えた。例えば避難所では、食事の準備やトイレ掃除。子どもたちへ絵本を届けたり読み聞かせ会を開くなどの遊び相手。大学生たちは小中学生に勉強を教えた。多種多様なプログラムを携えて多くの団体や個人が南三陸入りしていた。さらには全国から続々と届けられて体育館に

積み上げられていく支援物資の整理や仕分けや供給も、ボランティアたちが担ってくれた。

ボランティアを助けるためのボランティアも駆け付けてくれた。作業のシフトづくりや割り振り。VCで働く人たちのための食事づくり。社協のパソコンの復旧、社協やVCの会計事務を手伝う公認会計士の方もいた。町のあちこちで、ピプスを着た多くのボランティアたちがスコップを振るった。

「ボランティアニーズは、近畿ブロックの応援部隊と一緒に、避難所を回りながら調べていきました。漁を再開したい、畑に打ち上げられたごみを片付けたいといっ

た要望も、漁協や農協を通じてVCに届けられました」（三浦さん）

年が明けて平成24(2012)年になると、仕事を再開する農家や漁家も増えた。例えばカキ養殖漁家では、出荷前のカキ殻に付いた付着物を取り除く「カキ磨き」作業や、カキ殻をむく「カキむき」などにボランティアたちが携わった。

ガレキが取り除かれ、除塩処理も施された田んぼでは稲作が再開し、ボランティアたちは苗を運び、手植えで田植えを手伝った。

こうしたお付き合いは、やがて個人と個人の縁や結び付きとなった。今でも毎年漁期や農繁期になると助っ人としてやってくる元ボランティアメンバーもいる。

暮らしの記憶を探し出した
「思い出探し隊」

社協は、VCを立ち上げた直後の3月末、ボランティアメンバーを中心に「思い出探し隊」を結成、ガレキに埋もれてしまった写真類を中心とした住民たちの暮らしの記憶や思い出の品々を探し出す活動を開始した。

活動は自衛隊員や警察官にも周

知され、ガレキ撤去や行方不明者の捜索中に写真類が目にとまり、作業の手を止めて拾い上げ、ボランティアセンターへ届けてくれた。「思い出探し隊」のメンバーは泥を丁寧に拭き取り、時に涙ぐんだりしながら品々を洗い、乾かした。

このプロジェクトは8月31日まで続けられた。参加人数は延べ5,000人に及び、約25万点もの

「思い出」が戻って来た。6月からは旧入谷小学校を会場に展示会として公開され、会場は喜びの声であふれた。持ち主が分からない写真については株式会社リコーの「セーブ・ザ・メモリー・プロジェクト」の協力を得てデジタル化して、南三陸社協の公式サイトで検索・閲覧することができる。



農業支援(平成26年5月31日)



海岸でのガレキやゴミの撤去作業(平成24年10月21日)



側溝の泥カキ作業(平成24年8月3日)



漁業支援(平成26年10月30日)



思い出探し隊の活動(平成23年4月)

第2章 絆～新たに生まれた交流と支援への感謝

被災者が被災者を支える
南三陸町独自の取り組みも

「全国社会福祉協議会／近畿ブロックの部隊は9月いっぱい引き上げましたが、その前に阪神淡路大震災での経験を生かした仮設住宅でのコミュニティづくりのための講師役となっていました。孤独死などの事故を起こさないためのケアシステムです」（三浦さん）

このシステムは、仮設住宅に住む高齢者に「訪問支援員」という職務を委嘱し、同じ仮設住宅団地に住む高齢者世帯や一人暮らしの人を訪ねてもらい「滞在型支援員制度」というものだ。システムづ

くりには町の保健福祉課も加わり、3月に宮城県庁を定年退職したばかりで行政ボランティアとして南三陸町に来ていた本間照雄氏にも参加していただいた。ちなみに「滞在型支援員制度」は県庁で長寿社会政策や地域福祉に携わってきた本間氏のアイデアだった。

「訪問支援員」の訪問を受けた側は「忘れられてはいない」と感じ、支援員を務めた高齢者もまた「地域に貢献できている」という手ごたえと生きがいを得られた。被災者が被災者を助ける、支えて支え合うというコミュニティづくりが果たした役割は大きく、南三陸町独自の取り組みとして、高く評価された。本間氏はその後、町の

「福祉アドバイザー」として7年間にわたって町の復興支援に関わり続けた。

「初めは戸惑いもたくさんあり、一日一日が本当に長く、こんな日々は早く過ぎてほしいと思っていました。それでも4月、5月と月日が進むうち、ノウハウのよいものが身についていきました。また、ボランティアの皆さんの真摯な対応と、多くの方からいただいた応援にはとても励まされ、町の人たちからも感謝の声が続々と届けられました。信頼が生まれていったのだと感じていました」（三浦さん）

町のファンとの交流を末永く繋ぐ
「南三陸応援団」

「南三陸町災害ボランティアセンター」は平成27(2015)年3月に一旦閉鎖されたが、「災害」の文字を取った「南三陸町ボランティアセンター」に改称して同じ敷地内の別の場所で基本的な機能を継承した。さらに、12月に開所した「南三陸町総合ケアセンター」の中に社協事務所とともに移転した。平時には具体的な活動は行わないが、緊急時には即応できるように体制を整えた。

町に駆け付けたボランティアの数は、平成27(2015)年3月までの4年間で延べ15万人にも達した。

いつしか、町にほれ込んで移住してくるボランティアや、住民と結婚する人も現れた。復旧や復興に関わったことで、今も住民と交流を続けている人たちも多い。いわば「南三陸ファン」になった人たちだ。

町は、こうした方々からこれまでにいただいてきた「支援」を「協働」へ、そして、第二の故郷として末永い絆が育まれるような「交流」へと発展させていくために、「南三陸町感謝・絆プロジェクト推進事業」を立ち上げて一般社団法人南三陸町観光協会に運営を委託。平成27(2015)年、同協会は「南三陸応援団」という活動

をスタートさせた。

南三陸応援団は、希望者に「団員」として登録していただき、団員と町がともに活動を作り上げていくのが特徴だった。町民も、町外で南三陸を応援してくださる方も、「イベントに参加する」「おでつて（お手伝い、ボランティア）に参加する」「お住まいの地域で応援する」等、さまざまな形で町を盛り上げた。まちづくり・地域活性化などへのご意見・ご要望も募集した。

団員の皆様には、町のイベントや商品・産物等の情報をメールマガジン等で発信。農業や漁業、町内外で開催するイベントがある時には手伝っていただいた。東京・神戸・仙台・岡山ほか各地で開催した南三陸応援団交流イベント

は、多くの団員と地域住民が触れ合う場となった。

登録者は当初目標に掲げていた2,000人をはるかに超え、最終的には3,000人を超える個人団員と60を超える企業・団体が登録した。

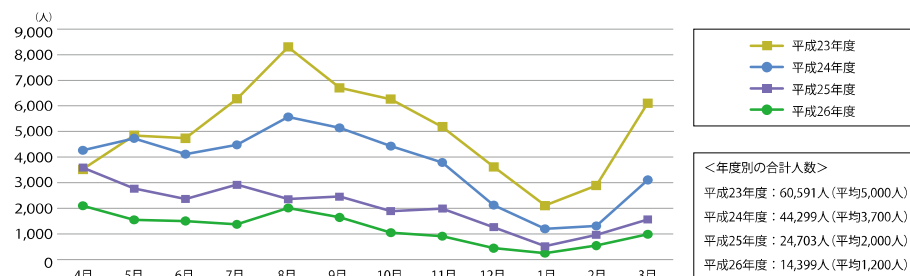
平成31(2019)年3月、発足から5年を一区切りとして観光を手段とした交流プロジェクトを前面に押し出した形にリニューアルし、機能の一部を「南三陸観光ポータルサイト」へ移行したが、町の情報配信やキャンペーン企画、メルマガ配信は今も継続中である。

まちと住民と全国の「応援団」たちがともにつくり上げた絆の架け橋は、末永い交流へとつながれて、今もさまざまな縁を育み続けている。



訪問支援員の皆さん(平成28年1月25日)

■ボランティアの延べ人数の推移(平成23～26年度)



「南三陸ボランティア感謝の集い」
(平成27年3月15日)



南三陸町ボランティアセンターと南三陸応援団の事務所開所の日(平成27年4月1日)



南三陸応援団の集い(平成28年1月30日)

第2章 絆～新たに生まれた交流と支援への感謝

まちに元気を ～南三陸福興市 100 回までの足取り

「動かないことには始まらない。」

「オレたちがみんなを元気にしよう。」

発災から49日目。未だガレキも片付けきれない町で、
店主たちは立ち上がった。

月1回、11年・100回を積み重ねて

町の復興を牽引し続けた

福興市の始まりだった。

仮設魚市場前で「志津川湾夏まつり」と同時開催された「志津川湾夏まつり福興市」(平成26年7月26日)

全国の商店街ネットワークの 力添えて50日あまりで商売を 再開

東日本大震災以前の南三陸町の商工会の所属会員数は562業者であった。会員数が500人を超える商工会は、全国に2,598ある商工会の中でも上位25%のグループに該当する規模だった。

志津川地区や歌津伊里前地区には商業集積地としての市街地が存在し、特に国道45号が街区の真ん中を貫く志津川地区には「おさかな通り商店街」をはじめ、商店が連なる路地が幾筋もあり、三陸沿岸を訪れた観光客も立ち寄り、新鮮な魚介類を購入するなど賑わいをみせていた。

しかし、東日本大震災の大津波は志津川・伊里前の商業施設を流失させ、8割以上の473業者に壊滅的な被害を与えた。

街区があった地区には、かつての

家屋や商業施設がガレキとなって至る所にうず高く積み重なり、手の付けようもない惨状だった。

けれども、志津川地区の業者たちは、発災から49日後の4月29日、ガレキの街を見晴らす志津川中学校グラウンドで青空市を開催。その後、町の名物市として全国にその名を知られることとなった「南三陸福興市」の始まりだった。

「とはいえ、売るものなんて何も無かった。でも、私たちには、心強い仲間がいてくれたのです。それが『ぼうさい朝市ネットワーク』の皆さんです。」

そう語るのは、南三陸福興市実行委員長の山内正文さんだ。

山内さんは、町で鮮魚や水産加工品の製造販売等を手掛ける株式会社ヤマウチの経営者だ。かつての「おさかな通り商店街」にも店舗があった。

「ぼうさい朝市ネットワーク（以下「ネットワーク」）」は、津波や大規

模災害が起きたとき、お互いに支援し合うことを目的に作られた全国の組織である。仕掛け人は、早稲田エコステーション研究所（東京都）の藤村望洋氏。大阪出身の藤村氏は自身の阪神淡路大震災での経験から、防災まちづくりへの取り組みを開始したという。

「ガレキの中で闇市を」 再開興す市が始まった

ネットワーク加盟団体は山形県の酒田中通商店街、鹿児島県宇宿商店街、岡山県笠岡本通商店街などのほか、長野県下諏訪町、愛知県春日井市、福井県福井市、兵庫県佐用町、三田市、和歌山県田辺市、愛媛県新居浜市など15から20の商店街で、宮城県では「おさかな通り商店街」だけが震災前からこのネットワークに参加していた。

発災直後、ネットワークは避難所



「第1回福興市」チラシ(平成23年)



平成26年7月26日の「志津川湾夏まつり福興市」は、夏まつりらしく歌や踊りもにぎやかに開催され、約2500発の「南三陸夢メッセージ花火」と「大森創作太鼓 旭ヶ浦」が競演した。

からの要望を聞いて全国の加盟団体にメールで連絡した。そして物資を直接被災地に届けると現場が混乱するとの判断から、隣県の山形県酒田市に支援物資をいったん集積。奥羽山脈を越えて、10日に一度ほどのペースで南三陸へと運んだ。

一方、藤村氏は発災から3～4日目には南三陸に入り、避難所だった小学校の体育館で山内さんら店主たちと対面した。

藤村さんは「あなたたち商業経営者がうつむいては、この町は立ち上がりません。ネットワークが全国からテントや商品も持って駆けつけます。」と、打ちひしがれていた店主たちを励ました。

「発災から間もない時期のことです。さすがに早いのではないかとも思いましたが、藤村さんの「ガレキのなかで闇市しよう」という一言がうれしく、とても勇気づけられました。」

山内さんは、南三陸の仲間を励ま

した。「できることをしてやろうじゃないか。」

その檄に店主たちも奮い立つ。「そうだ。ふさいでばかりいてもダメだ。」「動かないことには始まらない。」「オレたちがみんなを元気にしよう。」

4月10日、志津川中学校での会議を経て、4月29日と30日にテント市を開催することでまとまり、次いで4月18日の会議では市の名を「福興市」とすることも決まった。

「福を興す市」あるいは「市を興して幸福になる」との願いを込めた名称だった。

4月29日、避難所ともなっていた志津川中学校のグラウンドにテントが立ち並んだ。

テントの屋根には全国の市町・商店街の名前が入っていたが、店舗前には手作りした被災店の看板を立てた。

「ももとの業種とは関係のない商

品ばかりでした。でも、自分たちがもう一度やる、これからもまたやっていくんだという意思表示をしたかった。」と山内さん。

商品は、全国の商店街から届けられたものだ。日用品のほか洋服や呉服もあった。それらを全国から駆けつけた人たちと一しょに売った。

「私ですか?確か、九州のハマチを販売していました。」と山内さん。

来場した人たちも「買い物なんて久しぶりだ。」と喜んだ。バラバラに避難していた人たちが再会し、会場のあちこちで抱き合って涙を流す姿もあった。

「もちろん私たちも地元の人たちと再会できた嬉しさは大きかったです。思い切って早く立ち上げた甲斐があったと思いましたね。」

4月29日と30日の福興市には、南三陸町の住民を中心に約15,000人の来場者があったという。

第2章 絆～新たに生まれた交流と支援への感謝

町外・県外での開催も好評を得て
その名は全国にとどろいた

「まちに賑わいが戻った。」「また商売ができる。」「きっと復興できる。」

こうして始まった「福興市」は、毎月最終日曜日の開催が恒例となった。

1回目と2回目は志津川中学校を会場とした。2回目の開催時には、地元の魚屋の冷凍庫から魚を出してもらい、3回目からは自分たちで仕入れた商品も並べられ始めた。

その後、会場は町内の各地で開催された。ベイスайдアリーナ横の駐車場や、平成23(2011)年12月に仮設商店街としてオープンした歌津地区の「伊里前福幸商店街」、平成24(2012)年2月に立ち上げられた仮設の「南三陸さんさん商店街」。志津川漁魚市場前の道を通行止めにした広場が会場になったこともある。

開始から2年が過ぎたころからは、毎月の地元開催以外でも「福興市」の名称で町外や県外への出店もあった。登米市の佐沼地区

や、酒田市の「寒鰯まつり」への参加などのほか、仙台市の勾当台公園へは10年間で約10回出張し、東京都内や、遠く鹿児島県の商店街へも出掛けた。

「声を掛けていただいたら、都合の許す限りはどこへでも行きました。」(山内さん)

やがて季節ごとのテーマを掲げ、それが毎年同月の恒例ともなった。「わかめまつり(3月)」「志津川湾夏まつり(7月)」「八幡川かがり火まつり(8月下旬)」「南三陸町産業フェア(10月)」「おすばで祭り(12月)」などだ。

また、ぼうさい朝市ネットワークとは関連のない地方からの参加もあった。応援職員のつながりで、愛知県豊川市から東三河地方の伝統花火である手筒花火の愛好団体が駆けつけて、炎を噴き上げるような花火を披露してくれたこともあった。北海道や群馬県の自治体が地元の特産品を持って参加したり、企業や大学の有志が、小さなイベントや楽器演奏の企画を持ってきたこともある。



「八幡川かがり火まつり福興市」(平成26年8月30日)で行われた愛知県新城市民有志の皆さんによる「三河手筒花火」。南三陸町役場に派遣されてきた愛知県新城市役所の職員の橋渡しで実現した。

みんなが集い、絆も生まれ
「楽しんだ10年間だった」

令和2(2020)年の第97回以降は新型コロナウイルスの世界的流行もあり、開催が2年間、中止されたが、それ以外の期間は「南三陸町の名物市」として開催され続けた。福興市の名も全国に知られ、毎回多くの買い物客、観光客で賑わった。

途中2年間中断はあったが、福興市は平成23(2011)年4月から令和4(2022)年5月まで11年間、続けられたことになる。

そして令和4年5月29日、福興市は100回目の開催をもってフィナーレとなった。

「いつも同じメンバーの出店ばかりが続いていました。そろそろ若い人たちにステージを譲ろう。そんな意見が出ていたこともあり、100回目ですと区切りとしたのです。」

最後の福興市では、実行委員会のメンバーをはじめ全国から招いた十数名の招待客もステージに登って感謝状が贈られた。会場周囲を約3,000人もの人々が囲んで、大団円となった。

「一番は『感謝』ですね。なにしろ10年以上、100回も続けられたのですから。はじまりは津波の直後でしたし、正直つらい気持ちもありました。でも、全国の仲間が集まり、多くの方とつながることができた。今にして思えば楽しんだ10年間でした。」

被災した事業者が再起を目指す場として、そして産業の復興に果たした役割も大きい、と山内さんは言う。

福興市は、商業者の力をよみがえらせた。商店主たちは自信を取り戻し、仮設商店街の立ち上げの

きっかけにもなった。「南三陸さんさん商店街」や「ハマーレ歌津」のスタートも、福興市から始まったと言える。

福興市は、南三陸町の名を知らしめ、多くの南三陸ファンを獲得するきっかけともなった。訪れたボランティアたちも福興市を楽しみ、買い物や飲食することで町は人たちとの出会いの場ともなった。次には誰かを連れてきたり、SNSで発信したりという繰り返しでリピーターも増え、そうして生まれたたくさんのつながりや交流は今でも続いている。



第42回福興市と第24回おすばで祭りの併催で開催された「おすばで祭り福興市」(平成26年12月29日)



「志津川湾わかめまつり福興市(第45回)」(平成27年3月29日)に参加した岡山県笠岡市の「明日への架け橋 Kasaoka」の皆さん。片道15時間・往復約2,600kmをものともせず、この日が33回目の参加。



第100回福興市

そんな「名物市」でもあった福興市の復活はあるのだろうか？

「例えば年忌で開催しようかという案もありました。十三回忌だった令和5(2023)年は開催せずに過ぎてしまいましたが、何かをきっかけに、あるいは口実にもう一度開催される可能性はゼロではありません。」(山内さん)

福興市という名称ではないが、さんさん商店街では「ラムサル志津川湾おすばで祭り(例年12月29日)」のほか「寒鰯祭り(1月中)」「牡蠣祭り(2月中)」を『南三陸冬の三大祭り』として開催している。

「おすばで」とは、「酒の肴・つまみ」を意味する言葉だ。年越しやお正月の膳に欠かせないタコやアワビなど、ラムサル条約登録湿地である志津川湾の恵みを受けた魚介類や農産物などを得値で販売し、賑わいを見せている。

福興市は、まちの復興の大きな力になった。いつかまた開催されることがあれば、多くの人が戻って来たり、新しい人や力も集まって、新しいチャレンジや出会いがきっと生まれる。南三陸のさらなる魅力発信の場となることは間違いない。



「第100回記念福興市 大感謝祭」チラシ(令和4年)

第2章 絆～新たに生まれた交流と支援への感謝

海を越えて
～台湾からの支援

唯一の病院を失った南三陸町には
海外からも多く手が差し伸べられた。

台湾からの新病院建設支援という「縁」をきっかけに生まれた絆は
「復興の足取りを学ばせたい」「被災地の今を見てほしい」という交流へと発展した。

そして、台湾南部を大地震が襲った。今度は南三陸町が支援を贈る番。
海を越えて絆は続いていく。

南三陸病院

病院がなくなるという不安
安心と安全の確保を最優先に

平成23(2011)年3月11日、南三陸町唯一の病院である公立志津川病院は、大津波の直撃を受けて鉄筋コンクリート5階建施設の4階にまで波が到達。病院機能は一瞬にして停止した。

地域医療の中核を失った町は、復興計画の策定とは別に病院の再建と再開を最優先の課題に据え、その対応を急ぐこととなった。

18日後の3月29日、町に医師14人、看護師や検査技師など60人からなるイスラエルの医療チームが訪れ、災害対策本部と避難所が開設されていたベイサイドアリーナの駐車場に6棟のプレハブ診療所を建てて診察を開始。東日本大震災後、日本政府が海外の医療チームを受け入れたのはイスラエルが初めてであり、被災地で仮設診療所が開設されたのも南三陸

町が初めてだった。

4月10日、イスラエルチームは建物と医療設備を町に託して帰国した。4月13日、町は引き継いだ建物と設備で「公立志津川病院仮設診療所」を開設し、さらに平成24(2012)年4月1日に「公立南三陸診療所」と改称して、日本赤十字の支援により建てられた施設に移って診療を続けた。次いで6月1日には、登米市立よねやま病院の一部を借り受けて公立志津川病院を開院するなど、町としての医療サービスは継続された。

「それまであった病院が突然無くなるというのは、やはり不安なことです。病院が再建されるまでは近隣の病院へ通う人たちも多くいました」と、南三陸病院の事務長 佐藤宏明さん。

「公立志津川病院が地域内唯一の病院として果たしてきた役割の大きさを再認識しました。町の病院を再建させたい。安心と安全を実感でき

る復興とまちづくりには欠かせないものです」

台湾紅十字からの支援申し出に
町は「病院再建」を訴えた

町内に病院が無い状態が続いたことで、町外に移り住む住民もいた。誰もが医療と福祉の早期復旧を願ったが、病院再建という事業は、費用面を含めハードルが高い。

そんな中、町に中華民国台湾紅十字(赤十字)から打診があった。平成23(2011)年8月の時点で台湾国民から寄せられ、未配分だった47億円の義援金をもとに、被災三県と各市町村を支援したい。ついでには各自治体においてなが必要かをヒアリングしたいとのことだった。

「1つの自治体に1億円相当」と考えられていた義援金だったが、南三陸町は、最優先課題だった病院の再建にと要望額30億円で要請することに



記念品として贈られた感謝の大漁旗

感謝の記念品として贈られた大漁旗を受け取るルツ・カハノフ
イスラエル駐日大使(当時)

し、9月には町を訪れた台湾紅十字に佐藤仁町長がプレゼンテーションを行った。要望額の大きさに戸惑い気味だった紅十字側の表情を見た町長は「いささか無謀だったか、と思ったが、紅十字は「台湾へ持ち帰って検討する」と回答。その後、12月には、仲介者である日本赤十字社を経由して「満額は難しいかもしれないが、現地での感触は悪くない」との連絡があった。

平成24(2012)年2月、工事中だった公立南三陸診療所に、台湾紅十字が多数の台湾メディアとともに視察に訪れ、町と診療所を取材。そのときの模様台湾で放映された。

「いけるかもしれない——」町の関係者の期待は膨らんだ。

そして3月、台湾紅十字から正式に「南三陸町の病院再建に16億円、総合ケアセンター再建に6億2,000万円を支援する」との連絡が町に届いた。

町はこれを受けて、平成24(2012)年7月から病院建設基本計画策定委員会、並びに総合ケアセンター整備検討委員会を各6回開催。平成25(2013)年2月の整備計画の決定を経て、平成26(2014)年7月の着工となり、発災から4年8カ月後の平成27(2015)年11月25日、南三陸病院は、総合ケアセンター南三陸とともに完成落成式の日を迎え、12月より開院・開庁した。

台湾紅十字からの支援額は、新病院建設費約56億円のうち、約4割に相当する22億2,000万円だった。台湾紅十字が東日本大震災からの復興

を支援した施設建設費の中で、最多の支出額である。

病院を核とした
地域包括ケアシステムの再構築

落成式と同じ日、病院前に設置された感謝の石碑の除幕式も行われ、台湾紅十字組織の王清峰会長と佐藤仁町長の手によって紅白のロープが引かれた。

「町民は、台湾からの支援で病院が再建されたことをもちろん知っています。平成28(2016)年には、町は台湾の主要紙に感謝広告を出しました。また、台湾を訪問して紅十字を訪ね、町としての感謝も伝えました」(佐藤仁町長)

記念碑に記された英文は「Our Heartfelt Thanks to Taiwan」
(台湾に心から感謝いたします)

南三陸病院・総合ケアセンター南三陸の落成記念式典(平成27年11月25日)

第2章 絆～新たに生まれた交流と支援への感謝

新病院には公立志津川病院時代と同様の診療科がある。夜間救急にも対応できる。住民たちが希望する医療が提供できていることに感謝したいと佐藤さんは言う。

また、病院に隣接する総合ケアセンター南三陸には、保健センター、地域包括支援センター、子育て支援センター、障害者地域活動センターなどの機能が集約され、社会福祉協議会も入居する。

住民の健康づくりと福祉政策を進める行政としての効果的な体制は「地域包括ケアシステム」と呼ばれ、南三陸町では昭和63年に「町民医療福祉センター」を開設し、このシステムづくりをスタートさせていた。

健康づくりや生きがいづくり、食生活などを指導、推進、提唱して、病気やケガにならない身体づくりを目指す「保健」。

万が一、病気になってしまったときに診察を受けることができる「医療」。

老人福祉や在宅ケア、さらなる健康と生きがいづくり、障がい者の支援などを行う「福祉」。

「これらが1つの場所に集約されてフットワークが軽くなりました。そして支援をいただき再建できた病院は地域内唯一の病院です。これからも安定した医療を住民に提供していくこと。それが最大の感謝であり恩返しだと考えています」（佐藤さん）



病院の入り口と待合室

支援・受援の関係から 未来に向けた相互交流へ

復興支援という「ご縁」をきっかけに、台湾と南三陸町の間には徐々に交流の絆が芽生えていった。

平成26(2014)年には、町長を始めとする産業団体関係者が台湾を訪れ、復興支援感謝イベント「ありがとうキャンペーン」を実施、また支援団体等を訪問し感謝の意を直接お伝えさせていただいた。その際、「被災地に学ぶ防災・減災」や「日本との次世代交流」等を目的に継続的な交流への期待の声を受け、関係各所と連携のもと台湾からの教育旅行の誘致事業に着手した。

平成27(2015)年2月には台南市を中心とする学校関係者や旅行会社等、16人の視察団を受入れ、病院建設計の経過報告や復興事業の視察と共に、生命学習や産業・自然体験、民泊体験等、実際の教育旅行プログラムを体験していただき、受入れに向けた活発な意見交換を行った。また、海外からの教育旅行を誘致するにあたり、受入れ体制の整備や旅行会社、学校との調整役が必要であったことから、これらの業務について既に国内教育旅行受入れの実績がある一般社団法人南三陸町観光協会（以下「観光協会」。）に業務を委託し窓口の一本化を図った。その後、観光協会では現地ニーズの聞き取りや学校訪問を重ね、プログラムの造



台湾のインターン生たちの研修風景

成に取り組んだ。

「支援をいただいた、助けられたという関係性だけで終わらせるのではなく、今後の末永い交流に繋げていきたいという町の意向と、この震災の経験から復興していく町の姿に、生徒たちに困難や脅威に直面した時、自らはどう生きるか、ということを学んでほしいという先生方の意向を考慮しながらプログラム造成を行いました。」と事業開始当初の思いを語る観光協会旅行企画部門チーフの菅原さきさん。

12月、台湾北東部に位置する宜蘭県から待望の第1号となる学校が来町、平成28(2016)年1月には台南市からも生徒が訪れた。

「通常台湾から日本への教育旅行は、東京や京都、大阪といった主要都市観光が主流ですので、本当にこの町で良いのだろうか、という不安は少なからずありましたが、先生方そして生徒の皆さんの被災地に学ぶという姿勢、探求心は素晴らしい、私たちもこのプログラムを提供していくことの意義、そして必要性を再認識する大きな刺激になりました。」(菅原さん)

滞在中の通訳兼ガイドは台湾出身者で町内に住む南三陸町国際交流協会理事の佐藤金枝さんが担い、金枝さん自身の体験談を盛り込んだ生命学習のほか、地域では民泊体験、産業や自然に触れる体験が提供された。このような体験を通して被災してもなお立ち上がろうと踏ん張る町民の姿に、強く心を動かされた生徒も多く、台南市から参加した生徒の1人は、この経験を作文にまとめ、台湾での作文コンクールに応募したところ、素晴らしい成績を収めたという喜びの知らせが届いた。このことも契機となり、南三陸町のプログラムは台湾の関係者にも広く知られるところとなった。



教育旅行で訪れた台湾のインターン生たちを送る会

交流人口から関係人口へ ～インターンシッププログラム～

台湾からの教育旅行の受入れが契機となり、産業団体や企業等にもそのご縁は徐々に広がり、観光協会を中心に現地で商談会や学校訪問も積極的に展開し双方の交流の足掛かりとなるネットワークを構築していった。

そのような中、台湾各地の大学とのご縁から台湾の大学生を対象としたインターンシッププログラムがスタートした。プログラムは1～2カ月の長期滞在型で、町内の事業所での就業体験を軸に地方の暮らしや文化に触れる民泊体験、語学研修等をパッケージ化した。

観光協会も自ら学生を受入れ、台湾交流事業の推進を図った。例えば民泊家庭で活用できる繁体字（※1）指差し会話ブックの作成や各種PR媒体の翻訳業務、繁体字版 SNSでの情報発信業務等、学生の活躍は多岐にわたる。

「インターンシッププログラム修了生は、台湾に帰国後も南三陸町の情報発信や、台湾で開催されるPRイベントの際の応援団として活躍していただけるよう『南三陸交流大使』に任命をさせていただいています。」(菅原さん)

このプログラムで特徴的なのが、住民との交流の時間を多く設けているところだ。この内容が奏功し平成28(2016)年の受入れ開始から令和元

(2019)年度までに78人の学生がこのプログラムに参加している。新型コロナウイルスの世界的流行により令和4(2022)年度までは中止となったが、令和5(2023)年度には多くのニーズに後押しされ再開を果たした。

「インターンシッププログラムは、観光旅行とは異なり就業等を通じてまちづくりの根本にも触れる機会がありますので基本的には学習を主な目的としていますが、せっかくの機会なので『南三陸に来て良かった』と感じてほしいです、地域の方々のご縁を深め、学生の皆さんにとって南三陸町が日本のふるさどようになっていったら素敵だなと思いながら受入れを行っています。」(菅原さん)
（※1）繁体字とは、主に台湾で使われる中国語

台湾南部地震への支援 海を越えて絆は続く

平成28(2016)年2月、台湾南部地震が発生。教育旅行で町を訪れていた生徒たちが暮らす台南市や嘉義市でも大きな揺れを観測した。

これを受け町では台湾紅十字會を通じて義援金100万円を8日に送金。同時に公共施設でも募金活動を開始した。何より、東日本震災時に大きな支援を受けた台湾での被害とあって、民間レベルでの迅速な募金活動も活発化し、南三陸全体に台湾支援

の輪が広がっていった。

佐藤仁町長は「台湾からは多大な支援を頂戴した。一刻も早く支援を届けたいという我々の思いと町民の皆さんの台湾への恩返しの思いが一つになって迅速な支援活動に繋がったことはとても心強く感じている。」と語った。

台湾では毎年3月に日本人留學生が中心となり、東日本大震災への支援に対する感謝を伝えるイベント「謝詞（ありがとう）台湾（主催：謝詞台湾活動実行委員会）」が開催されている。令和4(2022)年3月に開催された同イベントでは佐藤仁町長がオンラインで参加し、改めて病院再建支援への感謝を伝えるとともに、現在の町の様子や、新型コロナウイルス感染が収束した後は交流を再開して台湾の皆さんをお迎えしたいというメッセージを届けた。

町では、多くのご縁や受け皿となる地域の方々の協力をいただき、台湾からの教育旅行やインターンシッププログラムの受入れ、高校生による交流事業等、多彩な交流を継続している。前出の佐藤金枝さんは「台湾は国際交流に力を入れています。その交流先に南三陸町を選んでくれたこと、そしてこれから未来を担っていく双方の若者たちの交流に関われることは、とても光栄ですし、嬉しく思います。」と語る。

支援をきっかけに結ばれたこの「縁」は、長く深く続いていく。



南三陸志津川湾夏まつりで「トコヤサイコンテスト」に参加した台湾嘉義高校の生徒たち(令和5年7月29日)



持続的な被災地支援 ～繋がりを広げ、思いを未来に紡ぐ

被災地の経済が自律的で持続的に成長していくためには、町と住民たちが自ら、産業をつくり、育てていかなければならない。もう一つ大切なのは、外部と繋がり、協働だ。震災の後、南三陸町では町民と支援者が協働して数々の事業を起こし、町の新たな魅力を発信している。ここでは3つの事例を選んで紹介しよう。

「学びで恩返しする」YES工房と「いりやど」

入谷地区には、地域住民が立ち上げた工房と、そこで持続的な支援を続ける大正大学との協働の例がある。「YES工房」と「いりやど」である。

「YES工房」は、旧入谷村中学校特別教室を活用して、南三陸名産のタコをモチーフとした人気キャラクター「オクトパス君」のほか、地産の木材を使用した多彩な木工品や、地区の養蚕文化を受け継いだ「まゆ細工」などの制作に取り組んでいる。「いりやど」は、大学や企業向けの宿泊施設である。

オクトパス君は、震災前に当時現場職員だった阿部忠義さんが考案した文鎮だ。

「タコは英語でオクトパス。文鎮として、また机の上に置くと試験にパスする、というシャレからスタートしたも

のです」

阿部さんは観光協会と連携し、震災の2年前の平成21(2009)年に合格祈願グッズとして発売した。次第に人気を集め、増産のために施設整備したばかりのアトリエは津波により倒壊。在庫も失ってしまった。

平成23(2011)年4月、入谷公民館へ異動となり避難所支援に取り組んでいた阿部さんのもとへ、東京の大正大学から学生をボランティアとして受け入れてほしいとの連絡があった。

町に入った学生たちは物資の運搬や炊き出し、避難所でのレクリエーションなどを担っていたが、ある日、オクトパス君を見て「かわいい」「復活させたい」「復興のシンボルにしましょう」と提案。以後、大学チームの応援を受けて、話はトントン拍子に進んだ。

「復活したオクトパス君の色付けを担当したのが私たちです」と話すのは、YES工房の代表・大森丈広さんだ。

「阿部さんが、避難所にいた女性に『せめてもの気晴らしにどう?』と声掛けし、色付け作業をスタート。そして5月の第2回『福興市』でオクトパス君はあらためてデビューしたのでした」

大森さんは志津川出身。震災から2週間後に帰郷したという。7月には、自分たちの力で復興への一歩を踏み出そうと町の有志が「南三陸復興ダコの会」を結成、旧入谷中学校校舎をリニューアルして「入谷YES工房」がオープンした。

そして平成24(2012)年2月。仮設商店街「南三陸さんさん商店街」の開設と同時にオクトパス君も本格展開を開始すると、その模様が27時間テレビで放映された。

「一気にブレイクしました」（大森さん）

南三陸復興ダコの会の活動は地域の活性化に貢献していると評価され、平成27(2015)年には総務省



旧入谷中学校を改装した「YES工房」の作業場



南三陸町の顔となっているゆるキャラ「オクトパス君」



「机の上に置くと試験にパスする」緑起物。試験合格ばかりでなく復興への願いも込められている



YES工房の代表・大森丈広さん



工房内に陳列された関連商品

「ふるさとづくり大賞」で総務大臣表彰を受賞。大森さんは平成30(2015)年、会長に就任した。

次いで大正大学は、町に学びの場をつくるプロジェクトを開始。平成25(2013)年3月には宿泊研修施設「南三陸まなびの里いりやど」を新築した。

運営は一般社団法人南三陸研修センターが担当。いわば「大設民営」だ。平成28(2016)年度に大正大学に新設された地域創生学部のエリアキャンパスとしても利用され、同学の継続的な地域支援の基地となっている。

「いりやど」と「YES工房」はグループ企業という位置づけである。YES工房では、オクトパス君の絵付けや、まゆ細工、木工などのワークショップで令和4(2022)年度には4,000人超を受け入れた。「いりやど」も、地域、自然、人といった資源を集めた農業や漁業体験など、企業や学生たちの要望に応じた研修プログラムを多彩に用意。来て、知って、そして面白い町だと思してほしいという。

阿部さんはこれを「学びで恩送り(恩返し)」だと話す。

「町に来てもらう上で、宿泊施設があるということはとても大きいもの。復興を応援してくれた他大学の学生たちも再訪時の定宿にしてくれたら、企業の研修場所にも選んでもらえる。町の人たちとのつながりも生まれ、交流人口拡大の受け皿として、支援を通じて繋がったネットワークを増やしたいです」(阿部さん)

大森さんもまた、受け皿という言葉を使う。



入谷出身で一般社団法人「南三陸研修センター」代表理事を務める阿部忠義さん。元公民館長で、今でも「館長さん」と呼ばれて親しまれている

「モノづくりが好きな若い世代の雇用の受け皿として成長していくことが今のYES工房の目標の一つです。仕事があることが地域に人が残れる理由にもなると思うので、合格祈願のオクトパス君や南三陸杉を活用した木製品の製作・販売といった「モノづくり」を通じて、雇用と交流の場づくりを実現したいです」

思いを未来へ繋ぐ人がある。まちは仕組みやツールもある。訪ねて、触れて、体感することで、物語は、ずっと先まで紡がれ続けていく。

地域の資料等も並ぶ「いりやど」のロビー



第2章 絆～新たに生まれた交流と支援への感謝

「南三陸のみんなとおいしく
なりたい」南三陸ワイナリー

令和2(2020)年10月7日、志津川漁港のそばに、町内初のワイン醸造施設である「南三陸ワイナリー」がオープンした。

大きな木枠の窓ガラスが印象的な施設は、敷地手前が「ショップ＆キッチン」と海を見晴らすことができるテラス棟。敷地奥にはワイナリーの心臓部である100坪の醸造棟がある。

施設の代表を務めるのは「南三陸ワイナリー株式会社」の代表取締役、佐々木道彦さんだ。佐々木さんは東日本大震災が発生した時、静岡県浜松市の大手企業で新規事業開発の部門にいた。山形県出身の佐々木さんは「東北のために」とボランティアバスで何度も三陸沿岸地方に通ったが、被災規模は甚大で、支援に終わりが感じられなかったという。

「人口も減少する被災地で、既存の産業でない何かを立ち上げたいと感じました」(佐々木さん)

震災後、3年間悩んだ。考えもまとまらないまま、平成26(2014)年、浜松市から仙台市へ移住。平成29(2017)年から仙台でウィンググラスを企画開発する中で、地域、食材とのつながりの深いワインの魅力を知ったという。

「お酒全般が好きでしたが、特別ワイン好きというわけではなかった」という佐々木さんだが、ワインという酒と地域の食材が広がる世界観に魅力を感じ、ワイナリーを立ち上げたいと思い始める。平成30(2018)年からは、仙台市太白区の「秋保ワイナリー」でもボランティアとして醸造作業に参加。また、山形県上山市のワインスクールに通い、栽培、醸造、ワイナリーの経営を学んだ。

そのような中で、佐々木さんは南三陸町が「南三陸ワインプロジェクト」を進めていることを知り、町の「地域おこし協力隊」に応募。平成31(2019)年1月、町に移住。2月には「南三陸ワイナリー株式会社」を立ち上げ、そして令和2(2020)年、現在地に「海の見えるワイナリー」をオープンした。

「南三陸町でワイナリーを立ち上げた理由ですか? ワインプロジェクトがキッカケだったこともあります。最大の理由は、このまちは海・里・山の恵みが豊かで、温かい人たちがたくさんいたということです。だからワイナリーのコンセプトも『南三陸のみんなとおいしくなりたい』なのです」

7月には、山形県産ぶどうを使って秋保ワイナリーに委託醸造の形で自ら醸造した南三陸ワイナリーとして初めてのワイン「DELAWARE 2018(デ

ラウェア2018)」が、日本ワインコンクール2019の北米系等品種・白部門において奨励賞を受賞した。宮城県産ワインとして同コンクール初受賞という快挙だった。

令和2年秋のショップ開設と醸造施設の稼働を開始したが、2月からは田束山の山頂近くの放牧場跡地で、日本でも注目を集めているスペイン原産品種ぶどう「アルバリーニョ」の栽培もスタートした。

アルバリーニョのワインは、魚介との相性が抜群。別名「海のワイン」と呼ばれ、リアス式海岸の名前の由来となったスペインのリアス・バイシャが主な産地である。南三陸ワイナリーでの醸造予定は令和6(2024)年度だ。日本のリアス(三陸)の山辺で育ったぶどうと、豊かな海の恵みとのマリアージュは、名も味わいも南三陸町らしい食卓の賑わいをつくりだしてくれるだろう。

「今、一番の目標は『継続』です。ぶどう農家として、ワイナリーとして、多くの人たちにたくさん支えられてきました。当社が掲げる『南三陸のみんなとおいしくなりたい』という言葉は、地域の食材や人々とワインの繋がりをもっと深めて、まちに賑わいをつくりだしたいという願いを込めたものです」

ここにもまた、物語の紡ぎ人がいた。

町の魅力を広く伝え
移住定住・交流人口の獲得を

震災後の被災地では転出が増加し、人口減少の抑止が課題となっている。その一方で、創造的な復興が進むまちに魅力を感じ、都会から移住を希望する人もいる。また、コロナ禍を経て、ZOOMなどを活用して会社以外の場での仕事のあり方も選択肢となり、地方に移り住んだり、週末は地方へ行くという人々も増えた。

南三陸町では、平成28(2016)年9月、役場庁舎1階エントランスの「マチドマ」に「南三陸町移住定住支援センター」(以下「支援センター」)を開設した。業務は、組織づくりやまちづくり、人材育成などで、地域創生の支援を目指す株式会社Pallet(パレット)に委託している。

「支援センターは、移住希望者の相談には専門機関の立ち上げが必要ということで開設されました。また、人口減や高齢化といった課題の解決や、移住定住や若者の就職支援なども視野に、まちづくりに幅広く関わっています」と話すのは、Pallet執行役員で地域共創事業部長の上野英律さんだ。自身も住まいがある仙台市と南三陸町を行き来し、いわば二拠点生活で仕事をこなしている。

上野さんは支援センター開設後、移住者を町の企業に受け入れてもらうため、商工会に対してもリーダー研修を働きかけるなどして、受け入れのための組織づくりと下地づくりをスタートさせた。「働く、暮らす、幸せを実感すること。それが移住定住には大切なことなのです」(上野さん)

支援センターでは、漠然と東北地方や宮城県に関心のある人々を取り込むために、町の魅力発信も行っている。

「窓口での相談受付ばかりでな

く、ホームページなどを使った魅力の発信や、実際に来てみて体験してもらうためのツアーなども実施しています」

南三陸町を移住先に考えている人は、どういった人たちのだろうか? 「海辺と山間の暮らしのコンバクトさ」が1つ。海ばかりでなく里の食材もおいしいまちです。『森里海ひといのちめぐるまち』というまちのキャッチフレーズにひかれる方も多そうです」

日本で初めてAFCとFSCという2つの国際認証を得た町である、という外部からの評価も分かりやすく、自然の恵みが豊富なまちなのだとアピールしやすい。

「傾向としては、南三陸町を選ぶ方はどこかマニアックな印象ですね。気仙沼市や石巻市などの大きなまちには華やきがあるけれど、南三陸なら化石が採取できるとか、釣りや、畑や田んぼの作業もできるという、どこかに土や潮の匂いを求めている感じでしょうか。『私だから南三陸町を選んで』みたいな方が多いかもしれません」

コロナ禍の時期には直接、町に来てもらうこともなかなか難しかったが、東京・有楽町にある「ふるさと回帰支援センター」の「宮城移住ガイ

ド」コーナーでの情報発信は続けていた。

「ここでは町のことや仕事の情報などが検索できます。ただ、求人に関しては、南三陸町はやや少なめです。今はまだ、仕事があるところへ行きたいと考える方が多いのです」

今後は、SNSやYou Tube、インターネットサイトの『南三陸なう』などを結んで、さらなる情報と魅力の発信を続ける。

「先輩移住者や町の人たちも巻き込んでの情報発信です。移住定住には至らなくても、友だちのような関係性がつくれたら、交流人口の獲得にも繋がる。多くの人に町の魅力を語ってもらい、いっしょに町をPRする。コミュニティネットワークがつくれたらと考えています」

持続的な被災地支援を語る場には「つくる」「つくりだす」といった言葉が必ず聞かれる。創生していくことがこそが復興であり、分けても「人づくり」こそが肝要だろう。未曾有の大災害に見舞われても、立ち上がり、歩み続ける南三陸町だからこそ、つくり出すことができる新しい価値がある。そうした「価値づくりを継承していく」ことで未来をつくり続ける人もまた育っていく。



「DELAWARE 2018」。令和元年の「日本ワインコンクール」で奨励賞を受賞



一部のワインを志津川湾のカキ棚に吊るして海中で9カ月間熟成させる。地上よりも熟成が早まるという



南三陸ワイナリーのショップ&キッチン内部

南三陸ワイナリー株式会社代表取締役、佐々木道彦さんと、醸造棟のワインタンク



株式会社Pallet地域共創事業部長の上野英律さん(中央)と南三陸町移住定住支援センターのスタッフ